

第Ⅰ章 指宿市の概要

第1節 自然的・地理的環境

本市には、火山地形が極めて多数密集して所在する。市域の大部分が10万5千年前から11万年前に噴火した阿多カルデラの範囲内に入っている。6,400年前には池田火山が噴火活動を開始し、池田カルデラを形成した。同時期に池田カルデラの南東側には池底、鰻池、成川、山川等のマール群が形成された。その後、池田カルデラの南西の指宿市開聞仙田付近で、鏡池マール群が形成された噴火が発生した。そして、4,000年前に本市の南西部海中で火山活動が始まり、開聞岳が形成され、西暦885年まで噴火を繰り返した。

このように、本市では火山活動が他に類を見ない地形を形成しており、これが本市の歴史文化の基盤となっている。さらに、火山は本市の各種産業の基礎でもある。特に、温泉は日本を代表する温泉地を形成している。

また、山頂部周辺が自然公園法に基づく特別保護地区に指定された開聞岳や、知林ヶ島をはじめとする魚見岳一帯など、計50.72km²が霧島錦江湾国立公園に指定されている。

こうした本市の特質を、地域計画では『火山銀座』と称する。

1 指宿市の位置、面積

本市は、鹿児島県本土の南部、薩摩半島の最南端で、鹿児島湾（錦江湾）口に位置する。東経130度30分から130度40分、北緯31度9分から31度18分に位置し、北は鹿児島市、西は南九州市と接している。本市の極東は知林ヶ島、極西は開聞十町の田ノ崎、極南は山川岡児ヶ水の長崎鼻、極北は小牧の瀬崎である。

総面積は148.82km²であり、地目別面積は、山林51.40km²、宅地12.93km²、田2.82km²、畑35.25km²、原野2.96km²、湖沼12.58km²、鉱泉地0.01km²、その他30.87km²である。

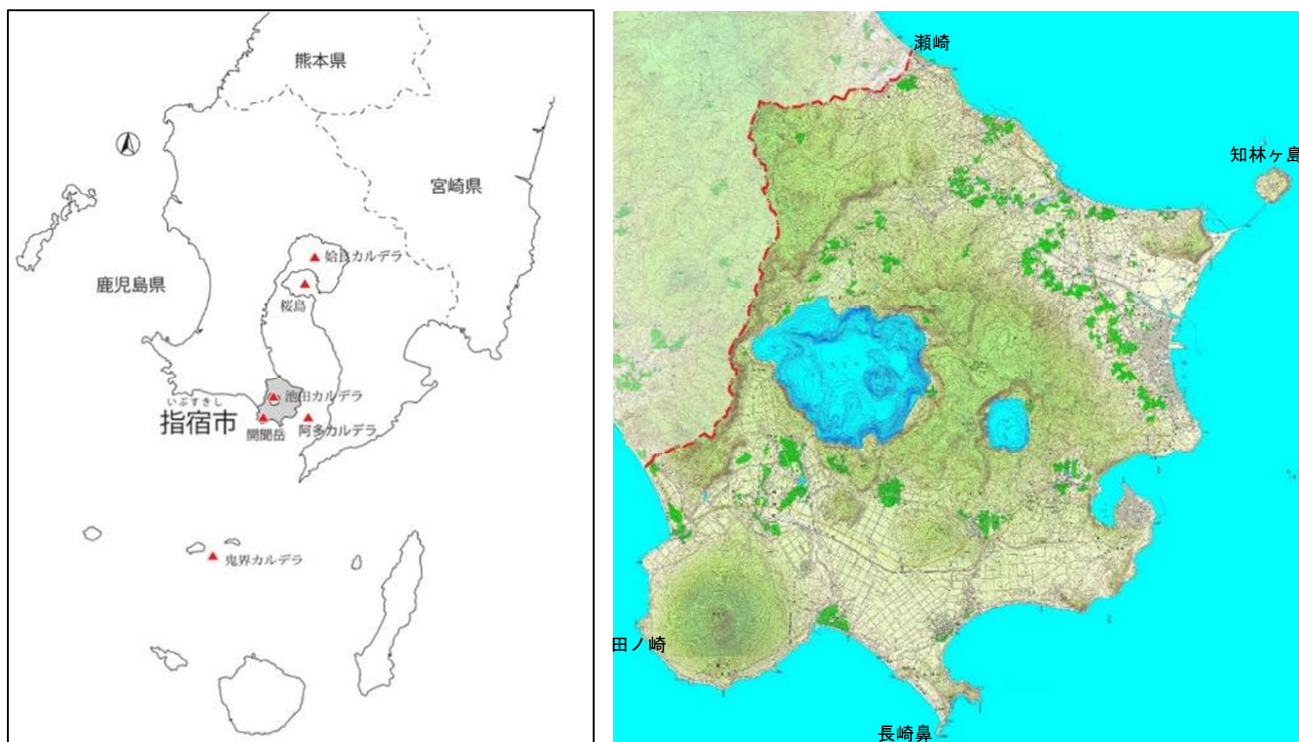


図5 指宿市の位置と全図

2 地形・地質・土壌

本市の地形・地質・土壌を記述するには、火山群の記載が不可欠であるため、本項ではそれを含めて記述する。なお、火山の記述と噴火年代等は、町田洋・新井房夫著の『新編火山灰アトラス』（2003年）、独立

行政法人産業技術総合研究所の『開聞岳地域の地質』（2005年）に準じた。

(1) 地形

本市の北部から西部に伸びる鬼門平断層崖^{おにかどびらだんそうがけ}は、急峻な断崖が10kmにわたって続く特徴的な地形である。本市の東北部に位置する魚見岳も、南側と東側に同様の断崖を有している。火山学者の松本唯一^{まつもとただいち}は、鬼門平断層崖と魚見岳とを結ぶ線を“阿多カルデラ”の一部とした。松本は、“阿多カルデラ”が本市の南部の長崎鼻北東側にある赤水岳^{あかみずだけ}の北側を通り、大隅半島に伸びるとした。鬼門平断層崖と魚見岳は、阿多カルデラの噴火に伴う阿多火砕流^{あさいりゅう}*1の噴出後に、指宿市一帯が陥没したことで形成された地形である。

魚見岳の東北東に位置する知林ヶ島は台地状の島で、干潮時には砂洲^{さす}で本土とつながる陸繋島^{りくけいとう}である。

指宿市街地西部から山川地域、開聞地域にかけて、多様な火山地形が分布する。代表的な火山地形は、比較的平坦な権現山成層火山体、カルデラ湖である池田湖、マール地形の鰻池や鏡池など、火山岩頸^{かざんがんけい}*2である竹山、溶岩ドームである辻之岳^{つじのたけ}・久世岳^{くぜだけ}などである。これらの火山地形は、阿多カルデラの噴火の後に形成された。

指宿市街地の西側にある権現山成層火山体には、火口と考えられる円弧状の尾根が残されるとともに、鷺尾岳^{わしおだけ}（411.0m）や清見岳^{きよみだけ}（401.9m）などの峰が形成されている。

市の中央部に位置する池田湖は、東西4.5km、南北3.5km、周囲15.0km、水面標高66m、最深部の深さが233mである。この湖の東岸にある尾下集落の西沖1kmの湖底には、高さ150mほどの溶岩ドーム^{おさがり}*3である地形がある。池田湖の南東側には、池田カルデラと同時期に活動した松ヶ窪^{まつがくぼ}、池底、鰻池、成川、山川のマール^{マール}*4群が北西-南東方向に直線的に並んでいる。鰻池マールは九州二番目の大きさの湖であり、山川マールは山川港と



図6 指宿市の火山地形分布

なっている。

池田湖の南側の山川地域と、北東側の指宿地域の湊川沿いには、池田火砕流堆積物が堆積してできた火砕流台地が広がっている。池田湖からの自然流出河川はなく、湖水は周辺に湧水として流出している。

池田カルデラの噴火の後、開聞仙田付近で鏡池マール群が形成され、池田湖南岸で鍋島岳溶岩ドームが形成された。

本市南西部には、ほとんど浸食を受けていない円錐形の火山である開聞岳がある。開聞岳は標高924mの、本市で最も高い山である。開聞岳の北側山腹の標高650m付近には、鉢窪火口が残っている。この火口の南半分は、開聞岳の山頂部の溶岩ドームによって埋め立てられている。

本市は河川の発達が悪い。やや大きな河川は、湊川、新川、及び二反田川であるが、いずれも河川長、流量とも大きくはない。沖積平野の発達も顕著ではなく、最も広い平野は、二反田川北側の平野である。この平野の南側には、江戸時代末期まで浅い入江が広がっていたが、鹿児島藩10代藩主島津斉興による新田開発に伴う干拓と二反田川からの土砂流入によって、陸地化したのである。

※1火砕流：火山灰や岩塊、火山ガスが一体となって急速に流下する現象。温度は数百℃に達する。

※2火山岩頭：火山の大部分が浸食された後に、溶岩の通り道である火道を埋めていた溶岩などが残されて塔状に突出した地形のこと。

※3溶岩ドーム：火山から粘性の高い溶岩が押し出されてできた、ドーム状の地形のこと。

※4マール：マグマが地下水と急激に反応し、水蒸気マグマ爆発という激しい爆発が起こった時に作られる円形の火口のこと。

(2) 地質・土壌

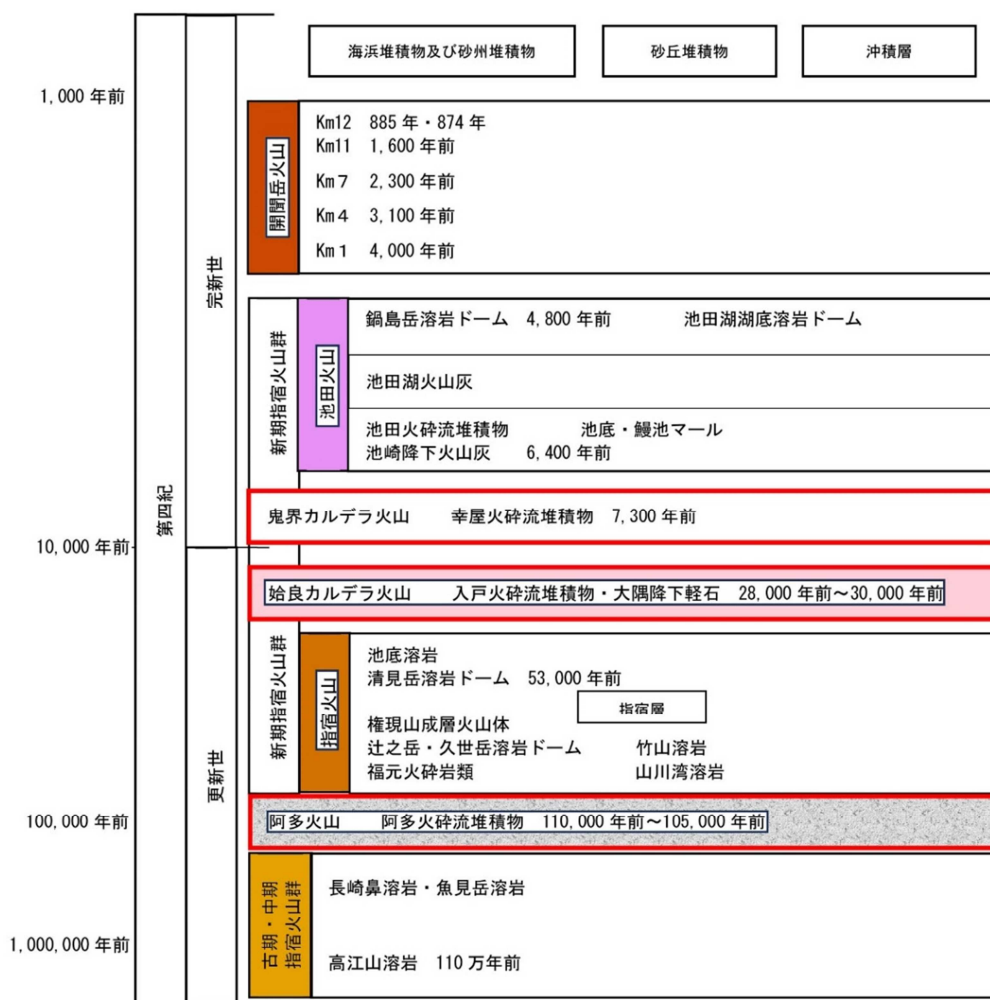


図7 指宿市の地質年表

この図は地質時代のうち、新生代・第四紀の更新世と完新世のみを抜粋した。図中の、「Km」は開聞岳火山灰の略称である。

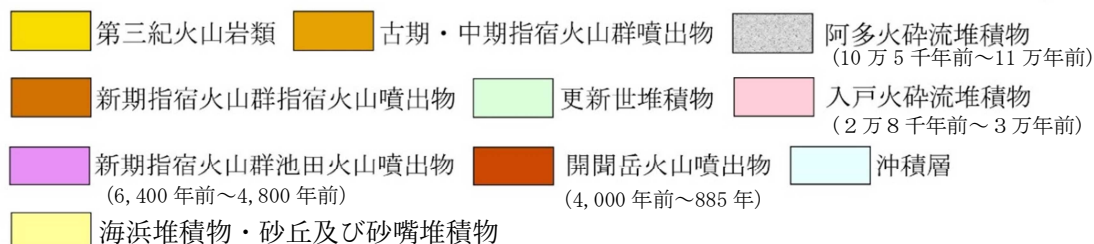
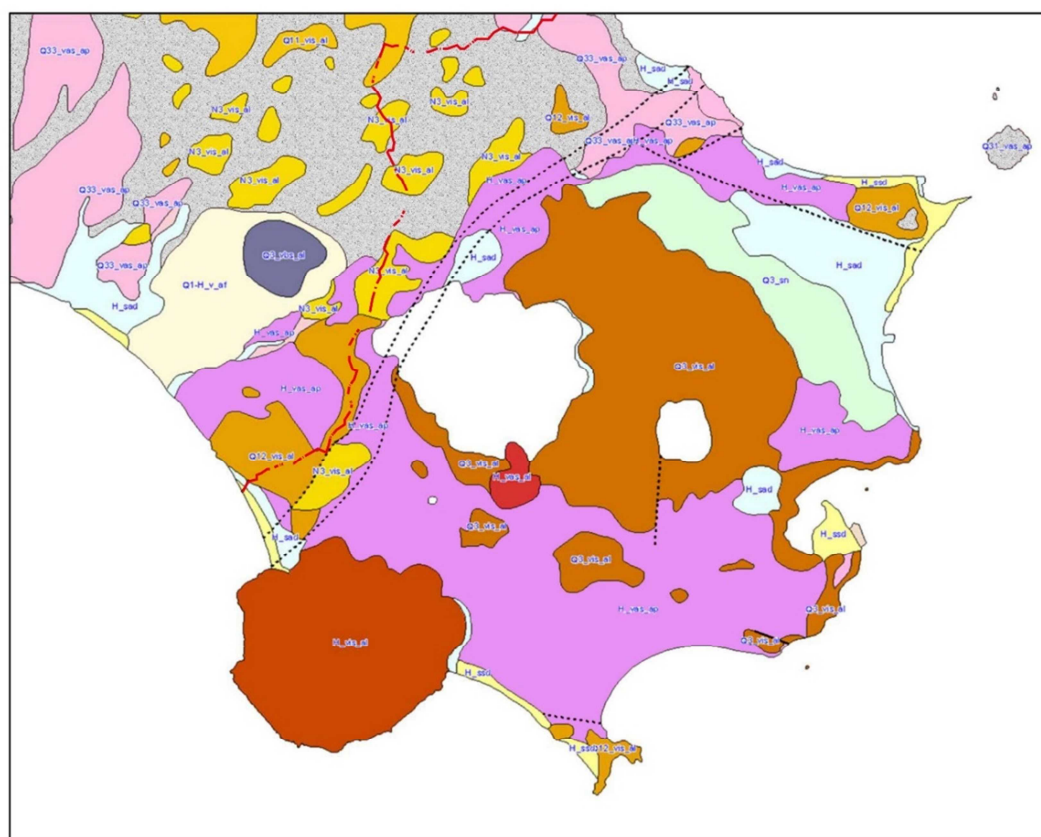


図8 指宿市の地質概略図

独立行政法人産業技術総合研究所『開聞岳地域の地質』から一部改変。噴火年代は『火山灰アトラス』から引用。

本市は、110万年前以降に発生した火山活動によって、ほぼ全域にわたってその時期の噴出物が分布している。ただ、鬼門平断層崖では、古い地層が露出しており、600万年前に形成された凝灰岩^{※1}である「池田石」が分布している。

本市の北部には、110万年前に噴出した溶岩が確認できる高江山^{たかえやま}がある。また、南部の長崎鼻や東部の魚見岳には、11万年以前に噴出した溶岩と火砕流が分布している。

阿多カルデラの外側に当たる岩本の海岸や知林ヶ島には、10万5千年前から11万年前に阿多カルデラから噴出した阿多火砕流堆積物が主に分布し、「阿多石」と通称される暗紫-暗灰色の溶結凝灰岩が採掘された。

阿多カルデラの内側に当たる指宿市内の大部分には、新しい時期の火山の噴出物が分布している。山川湾周辺には山川湾溶岩、山川福元付近で「山川石」と通称される福元火砕岩類^{ふくもととかさいがんるい}が分布している。

6,400年前に池田湖付近で噴火を開始した池田火山は、火砕流・火山灰・軽石を大量に噴出した。「伏目海岸^{ふしめ}の池田火砕流堆積物と噴気帯」（県指定）では、厚さ30mの火砕流堆積物が露出している。

4,000年前に噴火を開始した開聞岳の火山灰は、薩摩半島南部から大隅半島南部にかけて、広い範囲に分布している。この火山灰は、堆積後に強く固結することから、地元では亀の甲羅になぞらえて「コラ」と呼ばれており、色や質から12種類に分けられている。開聞川尻^{かわしり}の海岸では、ほとんどすべての火山灰層が見られる。

指宿市から離れた火山の噴出物も確認されている。2万8千年前～3万年前には、鹿児島湾奥で始良カルデ^{あいら}

ラの噴火が発生した。その火砕流堆積物は、^{みやがはま}宮ヶ浜から^{とじょういち}外城市付近の海岸にある垂直な崖で囲まれた台地に分布している。

7,300年前には、本市の南方海上の鬼界カルデラ火山の噴火が発生し、火砕流堆積物などが南九州一帯に堆積した。新西方の^{こうや}幸屋でこの火砕流堆積物が初めて発見されたことから、「幸屋火砕流」と命名された。

本市は山地が海岸近くに迫っていることから、沖積層は発達が悪いが、指宿市街地北側の^{につでん}二月田から指宿市街地東側の^{がたやま}潟山にかけての沖積平野に分布する。海浜堆積物、砂丘及び^{さし}砂嘴^{※3}堆積物は、鹿児島湾沿岸地域や、山川港に面した市街地が形成された砂嘴、開聞岳の西側の海岸線に分布する砂丘、干潮時に知林ヶ島を陸繋する砂州などに分布する。

※1凝灰岩：火山灰等の火山の噴出物が地上や水中に堆積し、できた岩石。

※2溶結凝灰岩：降り積もった火山灰や軽石が自らの熱と重みで溶けて固まった岩石。軽石が溶けてつぶれた溶結レンズを含む。

※3砂嘴：湾に面した海岸や岬の先端などから細長く突き出るように伸びている砂礫質の州。砂嘴が対岸にほとんど結びつくようになったものを砂州という。

3 気候

本市の気候は、西海型気候区に属し、その南端部に位置している。沿岸域を流れる黒潮の影響を受けて温暖多雨で、九州の典型的な気候を示すとともに、亜熱帯的な特徴も有している。

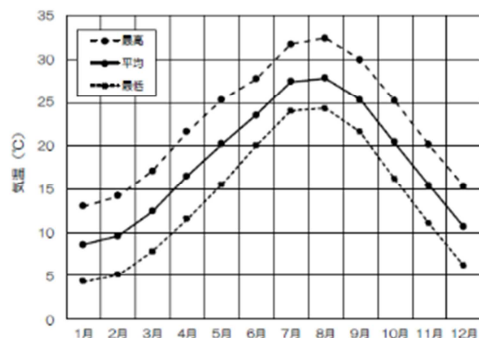
年間平均気温は18.6度、最高気温は35.4度、最低気温は－0.9度である。年間の総降水量は2,589.5mm、年間平均風速は1.8m/s、年平均日照時間は1,938.1時間となっている（統計いぶすき令和5年度版）。

6月の梅雨時期には激しい降雨（集中豪雨）が発生し、夏から秋にかけては台風が襲来することが多い。

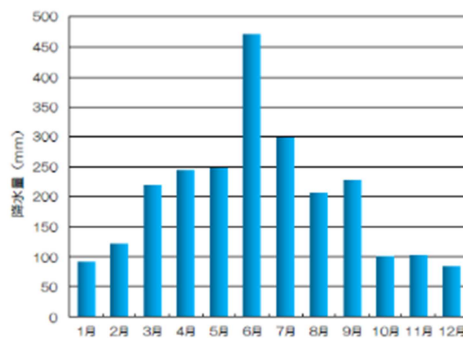
指宿市の気象の状況（平年値）

項 目		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
気温(℃)	最高	13.0	14.2	17.1	21.6	25.3	27.7	31.7	32.4	29.9	25.2	20.1	15.3	22.8
	平均	8.6	9.6	12.4	16.5	20.2	23.5	27.4	27.8	25.3	20.4	15.4	10.6	18.1
	最低	4.3	5.1	7.8	11.5	15.5	20.0	24.0	24.3	21.6	16.2	11.0	6.2	13.9
降水量(mm)		93.0	122.8	218.1	245.5	249.2	470.8	298.8	204.9	228.4	100.9	104.2	83.7	2420.1
平均風速(m/s)		1.7	1.8	1.7	1.6	1.4	1.5	1.6	1.6	1.4	1.3	1.4	1.6	1.6
日照時間(h)		122.2	130.6	145.6	165.3	169.5	122.8	197.0	215.7	184.0	184.1	151.5	143.3	1929.3

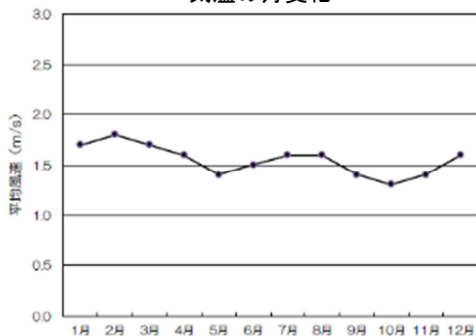
出典：「観測・統計データ 平年譜（1981～2010年）」（気象庁ホームページ）



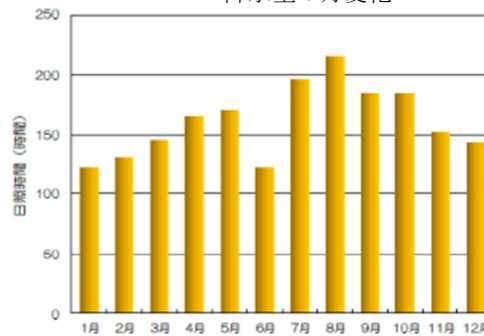
気温の月変化



降水量の月変化



平均風速の月変化



日照時間の月変化

図9 指宿市の気象の状況（「第二次指宿市環境基本計画」から）

4 生態系

県内に生息・生育する生物種の中には、暖温帯系の南限や亜熱帯系の北限となっているものが多い。本市においても、南限種や北限種の動植物が生息・生育しており、種の多様性が高い地域となっている。

一方、人間の移動や物流によって他の地域から入ってきた外来生物も多く、生態系のみならず、人間や農林水産業にまで幅広く悪影響を及ぼす場合がある。しかし、外来生物の中には、農作物や家畜、ペットのように、生活に欠かせない生き物もたくさんいる。本市での生息・生育の記録がある動植物種のうち、絶滅の恐れがあるため保護対象となる重要な種は以下に示す通りである。

(1) 動物

哺乳類 本市で生息が確認されている哺乳類は、7目11科21種である。このうち重要な種として、カヤネズミ・ホンドギツネ等15種が挙げられる。

鳥類 本市で生息が確認されている鳥類は、19目47科137種である。このうち重要な種として、カラスバト・オジロワシ・コアジサシ・ハヤブサ等32種が挙げられる。

爬虫類・両生類 本市で生息が確認されている爬虫類は、2目10科12種、両生類は2目5科8種である。このうち重要な種として、アカウミガメ・ニホンイシガメ等8種の爬虫類、イモリ等7種の両生類が挙げられる。

鹿児島県は全国で最もアカウミガメの上陸頭数が多い地域となっている。県は、ウミガメ保護条例を制定し、ウミガメの捕獲等を禁止している。本市においても、ウミガメ保護監視員を配置し、ウミガメの保護に努めている。

昆虫類 本市で生息が確認されている昆虫類は、12目78科153種である。このうち重要な種として、ベッコウトンボ・ハラビロハンミョウ・コガタノゲンゴロウ・ウラスジヒョウモン等56種が挙げられる。

魚類 本市で生息が確認されている魚類は、3目5科10種である。このうち重要な種として、ニホンウナギ・アベハゼの2種がある。

底生動物 本市で生息が確認されている底生動物は、2目3科10種である。このうち重要な種としては、タケノコカワニナ等8種が挙げられる。

(2) 植物

植生 市内の北部から山川にかけての山地は、スギ・ヒノキ・サワラ植林の占める割合が高く、常緑広葉樹の二次林が混じっている。

自然植生としては、開聞岳の標高400～600m付近にイスノキ-ウラジロガシ群集及びミミズバイースダジイ群集、標高700m以上にハイノキ-イヌツゲ群落が存在する。

植物相 本市で生育が確認されている植物は、103科332種である。このうち重要な種として、タチハコベ・カワラナデシコ・イヌハギ・ヒメノボタン・ミソコウジュ・ミカワタヌキモ・リュウノヒゲモ等159種が挙げられる。

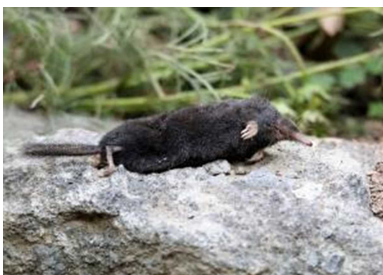


図10 ヒミズ※



図11 キクガシラコウモリ※

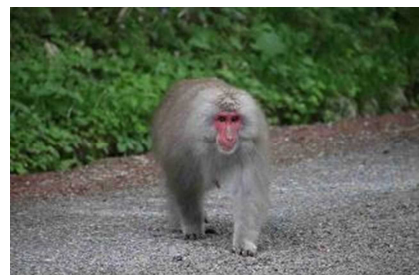


図12 ニホンザル※



図13 ヨシゴイ※



図14 オジロウシ※



図15 ハヤブサ※



図16 アカウミガメ



図17 アカハライモリ※



図18 ベッコウトンボ

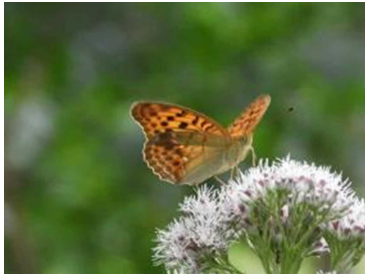


図19 ウラギンスジヒョウモン※



図20 イシマキガイ※



図21 ヒメウラボシ

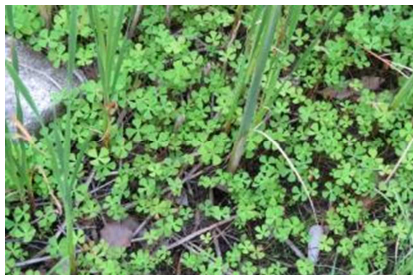


図22 ナンゴクデンジソウ※

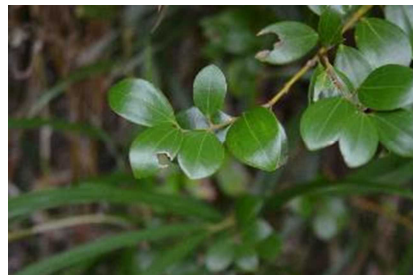


図23 マルバニッケイ※



図24 ユズリハ



図25 ナンゴクカモメツル

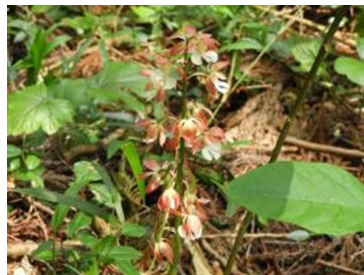


図26 エビネ※



図27 ナツエビネ



図28 ギボウシラン

※の写真出典：環境省自然環境局生物多様性センターホームページ「いきものログ」

5 景観

本市は、薩摩半島の南端に位置し、東シナ海と鹿児島湾に面する。九州地方最大の広さを誇る池田湖、その東側の鰻池や古くから南島貿易の重要な中継地であった山川港など、火山活動によって形成され、開放的で美しい自然の景観に恵まれている。また、豊富な湯量を利用した指宿砂むし温泉など、市内の各所には温泉が湧き出ており、本市を周遊する沿道には亜熱帯植物や色鮮やかな花壇が見られる。

市西南部には薩摩富士と称され、南薩摩地方の景観を象徴する開聞岳がある。市東部には環境省の「かおり風景百選」に選定され、潮の干満で陸続きになる知林ヶ島がある。さらに、市南部の沿岸部には南国ムードが漂う長崎鼻がある。

こうした立地条件のもと、整然と作付けされた農地など、火山性地形と生活圏が一体となった独特の景観が形成されている。

本市を代表する景観は、以下のようにまとめられる。

(1) 開聞岳・長崎鼻・竹山周辺地区

霧島錦江湾国立公園に指定されている開聞岳、長崎鼻周辺は、東シナ海を望むなだらかな丘陵に広がる農地と一体的な景観を構成する地区で、開聞岳や竹山などを背景とした自然景観が特徴的である。

また、薩摩国一宮である枚聞神社とその周辺域の^{たす}佇まいは、開聞岳を神体とする山岳信仰に根差したものとみわれ、歴史的な景観となっている。



図29 開聞岳

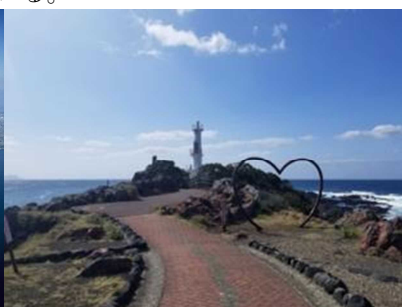


図30 長崎鼻

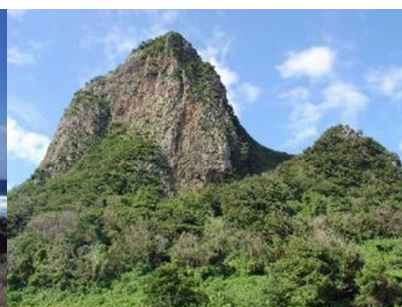


図31 竹山

(2) 池田湖・鰻池周辺地区

本市の中央部には、九州地方最大のカルデラ湖である池田湖がある。そして、池田湖湖畔の尾下の棚田や新永吉^{しん}の棚田など、当該地域の自然と人々の営みによって形成された景観がある。

また、九州地方第二位の大きさである鰻池の湖畔には、温泉の蒸気を利用した天然のかまどである「スメ」を活かした生活文化を示す景観が遺されている。



図32 池田湖



図33 新永吉の棚田



図34 鰻池

(3) ^{いまいずみ}今和泉・宮ヶ浜周辺地区

今和泉は、今和泉島津家本領本宅があったところで、屋敷の石垣や今和泉島津家墓所、隼人松原^{はやと}と呼ばれる松林といった、当時をしのばせる歴史文化資源が多数遺っている。



図35 今和泉島津家屋敷跡の石垣



図36 宮ヶ浜港防波堤（捍海隄）

宮ヶ浜集落・外城市集落には、中世に築かれた松尾城跡、天保4年(1833)に鹿児島藩10代藩主島津斉興が築かせた宮ヶ浜港防波堤がある。これに加え、明治から昭和初期にかけての商家や蔵が軒を連ねるまちなみが遺る、歴史的景観が形成されている。

(4) 指宿市街地周辺地区

指宿の市街地は、摺ヶ浜地区に立地する宿泊施設や砂むし温泉がある。また、指宿駅前及び中央通り商店街があり、人口が最も集中している都市的景観を有する地区である。

(5) 山川港周辺地区

山川港は、火山の噴火によって形成された天然の良港である。中世はヨーロッパ世界への玄関口であり、江戸時代には鹿児島藩による琉球貿易や砂糖輸送の拠点であったことから、歴史的な景観が遺っている。

現在は、山川港と大隅半島の根占港を結ぶカーフェリーが就航する、指宿の海の玄関口である。また、漁港周辺の水産加工施設や、道の駅などの観光施設も整備されており、歴史的景観と産業が作り出した景観が混じりあう地区である。



図37 山川港

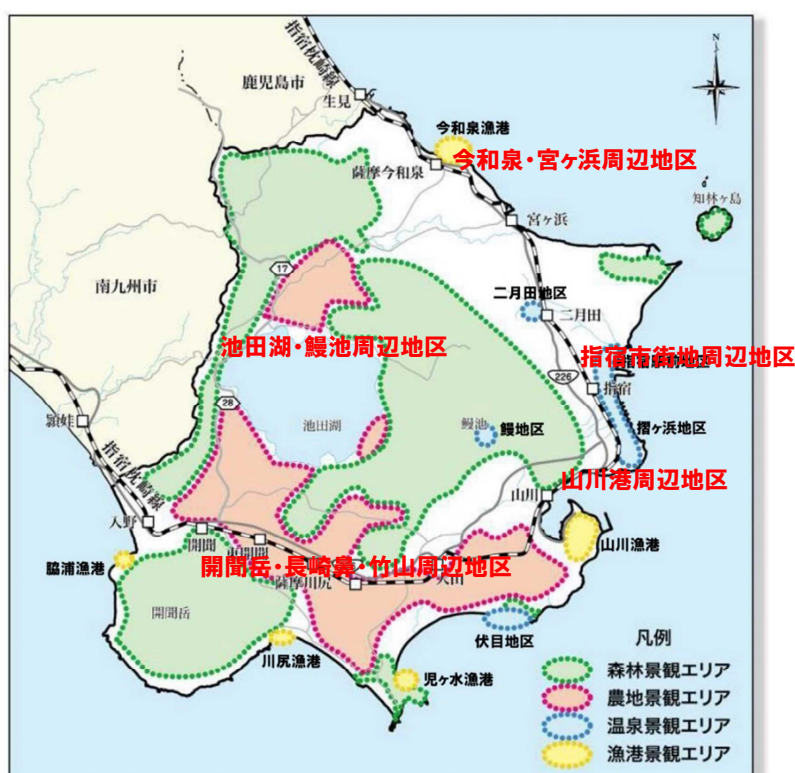


図38 指宿市景観エリア図（『指宿市景観計画』から）

第2節 社会的環境

1 市・町の変遷

本市の市・町の変遷の概要は、図39に表示した通りである。合併前の自治体名のうち、旧指宿市と旧開聞町は、平安時代中期の承平年間（931年～938年）に編纂された『和名類聚抄』に、「揖宿郡揖宿郷」と「顥娃郡開聞郷」と表記されており、それ以前には成立していた。旧山川町の前身である山川郷の成立は、天正20年（1592）に指宿郷のうち、山川村と成川村を分割し、一郷としたことである。

江戸時代には、指宿郡には指宿郷と山川郷があり、指宿郷には、岩本村、小牧村、拾町村、拾貳町村がある。現在の西方と東方は、享保10年（1725）まで拾九町村とされていた。顥娃郷のうち大山村は正保4年（1647）に、児ヶ水村は慶安3年（1650）に山川郷に編入された。

延享元年（1744）、今和泉郷が創設され、指宿郷岩本村、同小牧村、顥娃郷池田村、及び同仙田村の一部が旧郷から分離され、まとまれて成立した。この際、仙田村の一部は利永村となった。

明治22年（1889）の町村制施行により、「郷」は「村」に、「村」は「大字」になった。昭和23年（1948）には、今和泉村から大字利永が分離し、「利永村」が成立した。昭和26年（1951）には顥娃町から大字十町と大字仙田が分離し、「開聞村」が成立した。昭和28年（1953）の町村合併促進法の施行に伴い、昭和29年（1954）4月に「指宿町」と「今和泉村」が合併し、「指宿市」となった。

昭和30年（1955）には利永村が大字利永と大字上野に分かれ、前者が山川町に、後者が開聞町に編入された。

平成18年（2006）1月1日に指宿市・山川町・開聞町の1市2町が合併し、新指宿市となった。

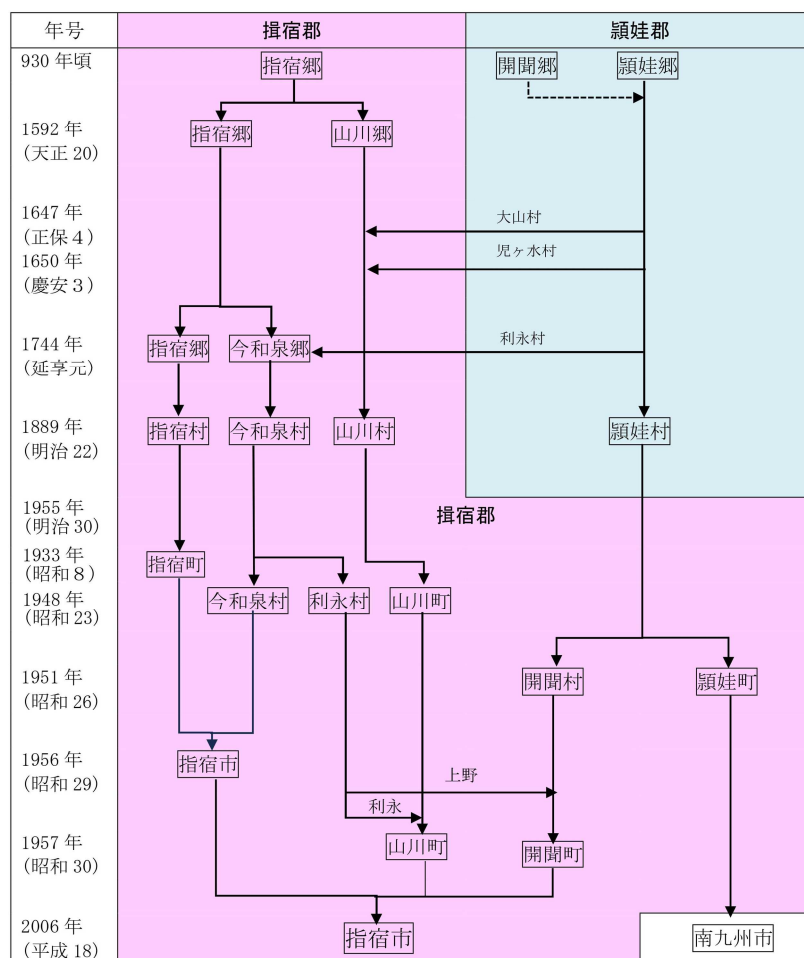


図39 市町村変遷図

2 地名

指宿市の地名に関しては、小川亥三郎の研究がある。指宿の地名の初出は、927年に編纂された『延喜式』^{えんぎしき}であり、「指宿」と表記され、『和名類聚抄』には、読みが「以夫須岐（イフスキ）」と記されている。指宿市には周辺自治体と比較して、湯の付く小字が圧倒的に多いことから、「指宿」の地名の本来の意味は、「湯生村（ユフスキ）」であり、和銅6年（713）の『諸国郡郷名著好字令』^{しよこくぐんごうめいしよこうじれい}の影響により、好字の「指宿」になった。戦国時代の天文12年（1543）に、津曲兼任^{つまがりかねとう}が建立した板碑の「湯豊宿（ユフスキ）」の表記は、本来の地名の意味に近い表記の事例である。

「開聞」の地名由来について小川は、開聞岳の名称「ヒラキキダケ」が元である。「ヒラキキ」は急傾斜や崖の意味の「ヒラ」と、洞窟のある山を指す「クキ」からなる、急傾斜の岩山の意味である。

「山川」に関しては、山陰の泉をさす語「ヤマンガ」が語源である。

本市の大字には、「岩本」・「小牧」・「新西方」・「池田」（以上、西指宿中学校区）、「西方」（北指宿中学校区）、「東方」（北指宿中学校区と南指宿中学校区にまたがる）、「十町」・「十二町」・「大牟礼」^{おおむれ}・「湊」^{みなと}・「湯の浜」（以上、南指宿中学校区）、「山川成川」・「山川小川」^{おがわ}・「山川福元」^{ふくもと}・「山川大山」・「山川利永」・「山川岡児ヶ水」・「山川浜児ヶ水」（以上、山川中学校区）、「開聞十町」・「開聞仙田」・「開聞上野」・「開聞川尻」（以上、開聞中学校区）がある。

大字の中には、条里制^{じょうりせい}の遺称である、十町・十二町がある。また、西方と東方は江戸時代の延宝2年（1674）に拾九町村が分村し成立しことから、元々は、十町、十二町、拾九町があった。これらの数字の和は41町である。建久8年（1197）の『薩摩国図田帳』^{さつまのくにずでんちょう}には、指宿郡の田数が47町となっており、41町に近似している。このことから、十町、十二町、拾九町は条里制遺称である。開聞十町もこれに類する地名と想定できる。

他には、地形の特徴を反映した大字が多くある。岩本は今和泉島津家墓所の東隣にある岩山に由来し、大岩の周囲の土地を指している。湖水・河川関係では、池田が池田湖（江戸時代は池田池）との関連から来ている。山川成川は盆地の中央を流れる鳴川^{なるかわ}との関連から、大字山川小川は地区にある清水川との関連から、開聞川尻は新川の河口部分であることから来ている。

山岳関係では、山川大山は隣接する辻之岳との関連から、開聞上野は中世の山城跡でもある丘陵地に位置することとの関連から来ている。尾下は池田湖畔に下った場所を意味する。

港湾関係では、湊は昭和時代の住居表示実施に伴い採用されたが、江戸時代においては「湊浦」^{うら}と呼ばれており、8代濱崎太平次が海運の拠点とし、大規模な造船所を置いた場所である。

集落関係の名称では、大牟礼が村を意味する「ムレ」から、山川福元が明暦3年（1657）に「山川仮屋」から「福元仮屋」へ改称されたことから来ている。「福元」は中世山城の麓集落の「フモト」が訛ったものである。

山川岡児ヶ水・山川浜児ヶ水の児ヶ水は、神性を有する童への信仰と、現地にある泉との関連がある。山川利永に関しては、現在のところその語源は不詳である。

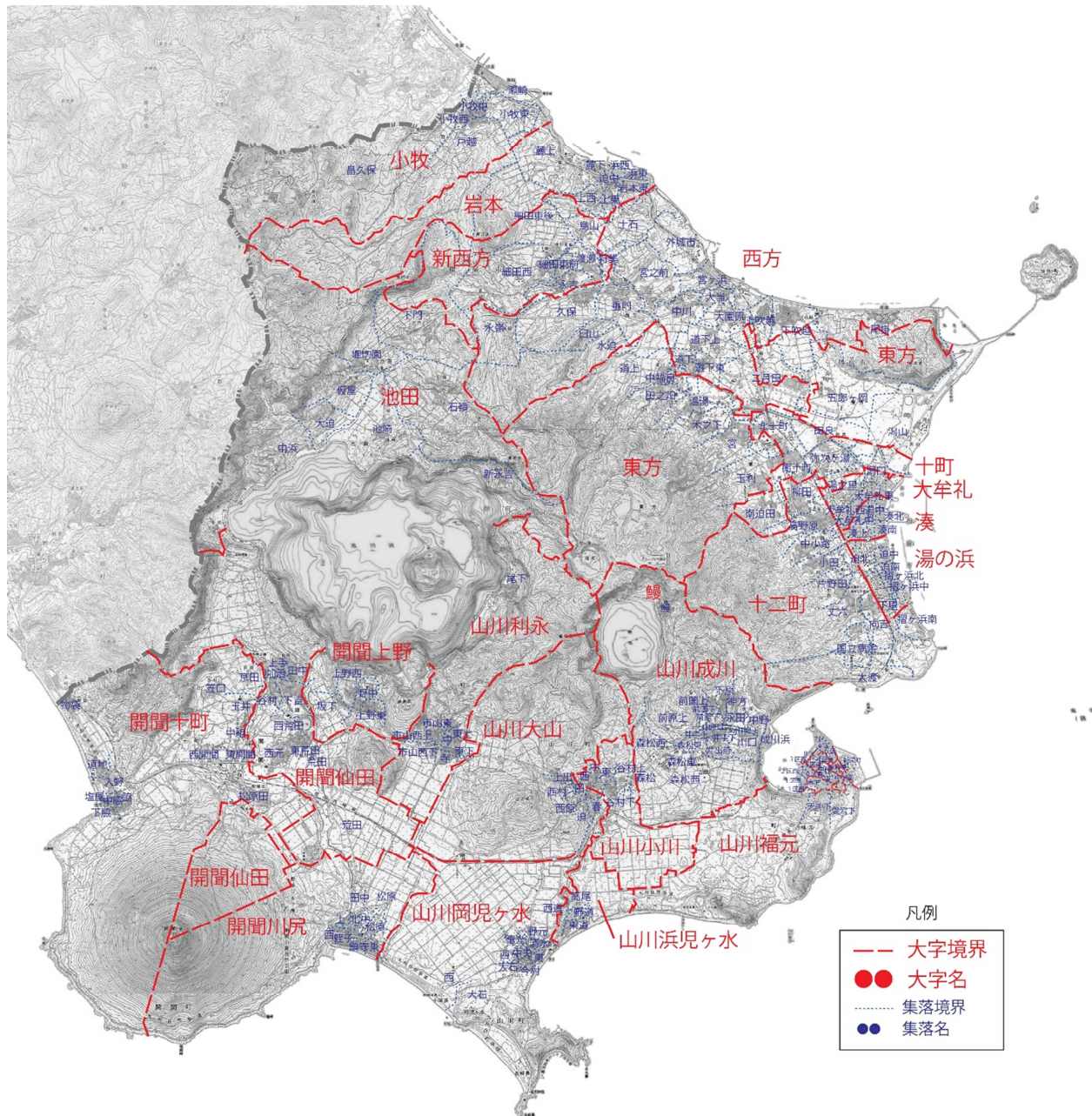


図40 指宿市大字・集落配置図

3 市内地区

本市の歴史的成り立ちについては、旧行政区分に立脚した地区区分により整理されてきている。旧山川町・旧開聞町の範囲は、現在の山川中学校区、開聞中学校区と重なっている。平成18年（2006）の合併以前の旧指宿市は、昭和29年（1954）に指宿町と今和泉村とが合併してできた。今和泉村は西指宿中学校区とほぼ重なっている。そして、旧指宿町は近世以前には指宿郷であり、この郷は十九町村・十町村・十二町村に分かれていた。旧十九町村は政治的・経済的中心地であり、北指宿中学校区と範囲がほぼ重なっている。十町村・十二町村は、温泉地の中心であるとともに、江戸時代に豪商が根拠地とした地域であり、南指宿中学校区と範囲がほぼ重なっている。このように、指宿市内の中学校区は、近世以前の行政区分と範囲がほぼ重なっていることから、地域計画の歴史文化の記述とも合致することが多い。そのため、本計画には中学校区も併用することとする。

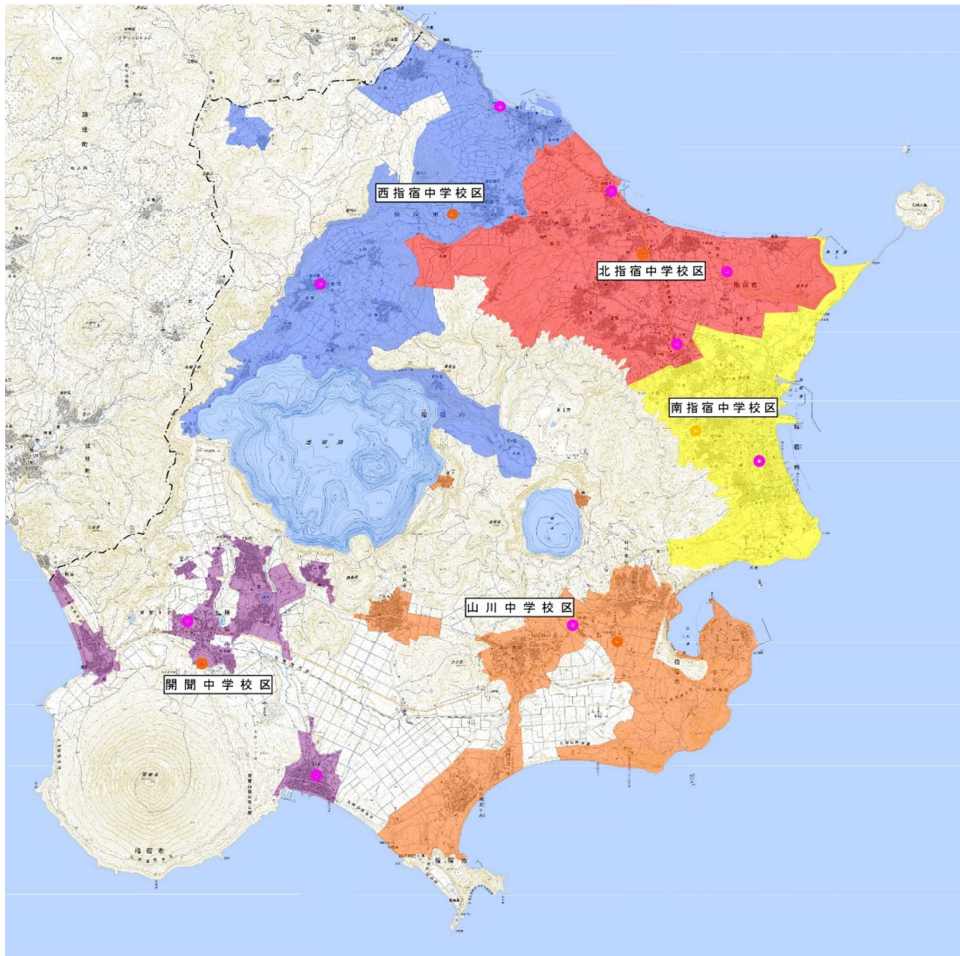


図41 中学校区

4 人口動態

本市の人口は、令和6年6月で推計36,656人である。昭和25年（1950）に67,977人に達し、ピークを迎えた。その後は、「出生・死亡数」の差である自然減と「転入・転出数」の差である社会減により減少を続け、平成22年（2010）に人口が44,396人となった。国立社会保障・人口問題研究所によると、令和27年（2045）の本市の人口予測は、25,432人まで減少する見込みであり、平成27年（2015）からの30年間で、16,000人程減少すると推計されている。

また、本市の年齢3区分別の人口をみると、昭和55年（1980）以降、年少人口と生産年齢人口が減少しており、それに伴い、総人口が減少している状況にある。老年人口は、昭和55年（1980）以降、増加傾向にあり、平成2年（1990）には、老年人口が年少人口を上回っている。将来人口推計によると、老年人口は今後も増加を続けるが、令和2年（2020）以降は、年齢3区分全てにおいて減少し、結果、総人口の減少が急速に進む見込みである。令和27年（2045）には、生産年齢人口と老年人口が同程度となり、高齢化率が44%まで上昇するとされている。

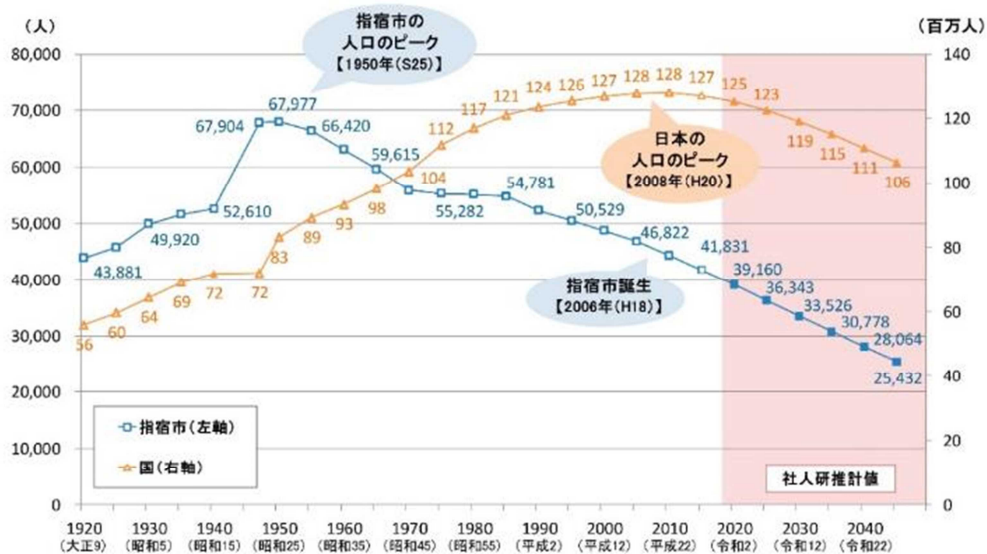


図42 総人口の推移（『第二期指宿市人口ビジョン』より）

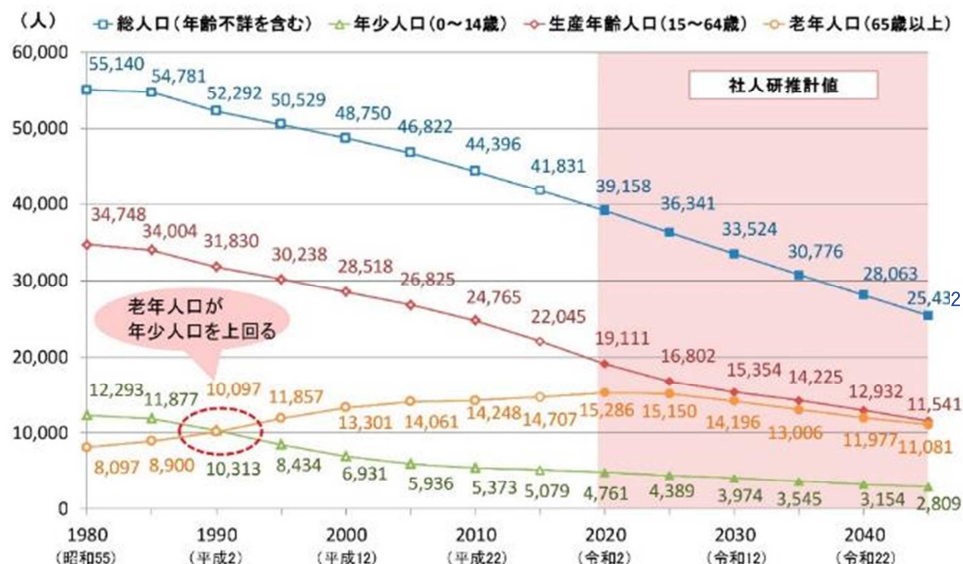


図43 年齢3区分の推移及び将来人口の予想（『第二期指宿市人口ビジョン』より）

5 産業

(1) 産業構造

日本の産業構造は、全国的に第一次産業から第二次、第三次産業へと移行しつつあるところである。本市においても、昭和35年（1960）には第一次産業人口が全体の62.7%を占め産業構造の中で突出していたが、平成22年（2010）には22.4%まで落ち込んだ。令和2年（2020）の国勢調査においては、21.1%と状況に変化はない。その反面、第三次産業人口は26.9%から62.5%にまで増えている。これは多業種の大型店舗がオープンしたことなどが要因の一つと考えられる。令和2年（2020）の国勢調査においては、第三次産業就業者数が65.4%と増加傾向にある。

(2) 各種産業の現状

① 農林水産業

農業については、温暖な気候と豊富な水資源や温泉熱、基盤整備された広大な農地などの有利性が生かされている。ソラマメ、実エンドウ、スナップエンドウ、オクラ等の野菜をはじめ、花き・観葉植物、果樹、葉たばこ等の生産や畜産が盛んに行われている。特に、野菜や畜産の農業産出額は九州で上位にあり、市内総生産

額についても、全体の一割を占める重要産業となっている。平成16年（2004）10月1日にオープンした道の駅いぶすき「彩花菜館」では、地元の農産物や海産物をはじめとする商品のPRに努めている。

林業については、長期的な低迷、森林所有者の森林への関心の低下などによって、森林の管理・経営が十分になされていない。また、林業従事者の減少・高齢化なども進んでいることから厳しい状況にある。しかし、スギ・ヒノキを中心とした人工林が適伐期を迎えており、森林資源が充実していることから、木材生産形態が間伐から主伐へシフトすることが予想されている。

水産業については、山川漁港における冷凍カツオが、静岡県やいづの焼津漁港、鹿児島県まくらざきの枕崎漁港と並び国内有数の水揚量がある。また、鰹節かつおぶしの生産量は年間5,000トンで、全国の鰹節生産量の2割を占める。このうち、鰹節の中で最高級とされる本枯節ほんがれぶしは、国内生産の7割が生産され、全国でも有数の生産地となっている。また、平成21年（2009）4月にオープンし、平成23年度（2011）には道の駅として登録された、いぶすき山川港特産市場である道の駅山川港「活お海道」い かいどうは、山川港のPR拠点として農林水産物の展示販売や観光情報の提供を行っている。そして、地場産業の振興を図るとともに、市民と利用者との交流促進の場になるなど、農山漁村の活性化を推進している。

② 製造業及び商工業

製造業については、業種別に事業所を見ると、食料品や飲料などの消費関連製造業が多く、地域に密着した業種が育っている。しかし、人手不足対策のため生産性向上に努めなければならないような経営基盤の弱い中小企業がほとんどで、技術や経営の面で多くの課題を抱えている。

小売業については、その大半を中小経営者が占めている。また、地域の商店街は、郊外型大型店の進出や消費者ニーズの多様化により来客や店舗数の減少、空き店舗の増加など、厳しい経営状況下にある。

企業誘致については、経済情勢や地理的条件から進んでいない状況である。

③ 観光産業

本市は、天然砂むし温泉や豊富に湧出する温泉をはじめ、国立公園に指定された開聞岳、長崎鼻、池田湖、知林ヶ島の美しい自然に恵まれている。また、生産量日本一のオクラやソラマメ、鰹本枯節に代表されるように食が豊富である。そして、一足早い春の訪れを告げる「いぶすき菜の花マラソン大会」や「いぶすき菜の花マーチ」、「いぶすきフラフェスティバル」といった大規模イベントが開催されている。また、地域一体となってもてなす、ホスピタリティにあふれる人柄など、豊富な地域資源に恵まれている。

平成23年（2011）3月の九州新幹線全線開業と特急「指宿のたまて箱」の運行開始により、県外から本市までのアクセスが容易になっている。さらに、平成24年（2012）の台湾からの直行便就航や、平成26年（2014）以降、香港線や韓国線のLCC（格安航空会社）が就航し、鹿児島空港への国際線の発着が増加している。このように、インバウンドのアクセス環境が改善されてきている。

令和3年（2021）の奄美の世界自然遺産登録や、令和5年（2023）の「かごしま国体・かごしま大会」により、鹿児島県に目が向く機会が増えている。本市においても、令和3年（2021）1月にいぶすきフットボールパークが、令和4年（2022）7月には指宿市民会館がオープンし、また、池田湖周辺や指宿港海岸の整備も進んでいる。令和4年（2022）10月にIKEDAKO PAXがオープンした。

令和元年の観光入り組み客数は、3,710,541人である。このうち、延べ宿泊者数は614,357人、延べ日帰り客数は3,096,184人である。

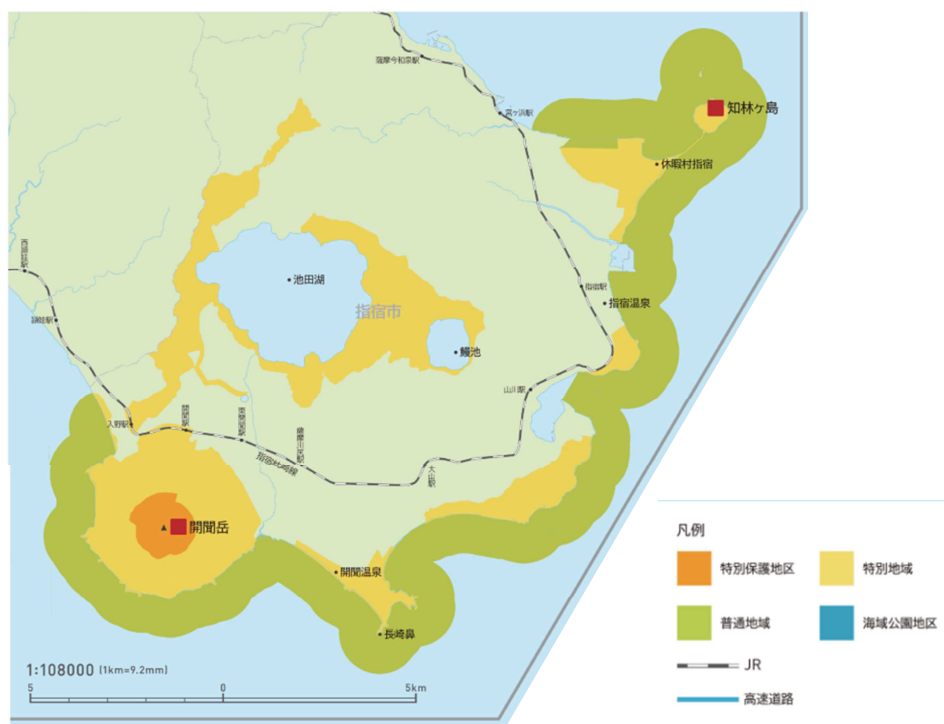


図44 霧島錦江湾国立公園範囲図

6 土地利用

本市の総面積は 148.82km²であり、都市計画区域^{※1}が67.37km²（うち用途地域^{※2}が6.45km²），農業振興地域が108.33km²指定されている。

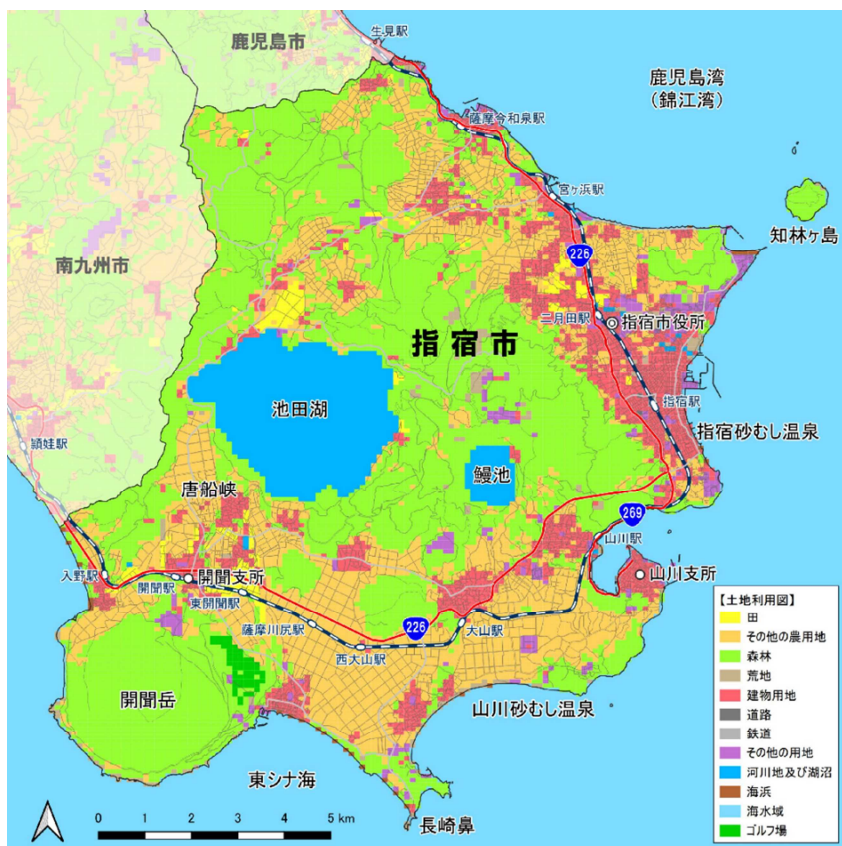


図45 土地利用状況図（『指宿市地域公共交通計画』から）

地目別面積は、山林が51.40km²（総面積の34.54%）、農用地（田・畑）が38.07km²（同25.58%）、宅地が12.93km²（同8.69%）などとなっており、平成31年（2019）と比較すると、山林が0.08km²、宅地が0.01km²増加し、農用地は0.28km²減少している。

※1 都市計画区域：自然的・社会的条件や人口、土地利用、交通量等の現状と将来の見通しを勘案して、一体の都市として総合的に整備、開発、保全する必要がある区域のこと。

※2 用途地域：都市の将来のあるべき土地利用を実現するため、建築物の用途・容積・形態について制限を定める地域のこと。

7 交通

鉄道は、県庁所在地である鹿児島市と枕崎市を結ぶJR指宿枕崎線が、市域東部から南部にかけて敷設されている。市域には薩摩今和泉駅・宮ヶ浜駅・二月田駅・指宿駅・山川駅・大山駅・西大山駅・薩摩川尻駅・東開聞駅・開聞駅・入野駅の11駅が置かれている。指宿駅は、昭和9年（1934）に当時の指宿線延伸に伴い設置された。その後、指宿線は西に延伸し、昭和11年（1936）には山川駅が、昭和35年（1960）には西郷桂駅が設置された。西郷桂駅の設置に伴い、その間に大山駅から入野駅が設置された。そして、昭和38年（1963）に指宿線は枕崎まで延伸したことで、指宿枕崎線と改称された。

平成23年（2011）3月には、九州新幹線鹿児島ルートが全線開業した。このことで、新幹線が本州と直通になり、鹿児島中央駅から博多駅までは所要時間が1時間20分となった。また、九州新幹線鹿児島ルートの中全開業に伴って、特急「指宿のたまて箱」が鹿児島中央駅から指宿駅の間で運行が開始された。

路線バスは、鹿児島交通がたまた箱温泉と鹿児島市との間を繋いでおり、途中、山川駅、指宿駅、谷山駅、



図46 指宿市の交通網（『指宿市地域公共交通計画』から）

鹿児島中央駅を経由している。鹿児島空港連絡線は、山川桟橋と鹿児島空港を結んでいる。JR指宿駅前には指宿駅前停留所が設けられている。

市内を運行する路線バスは、指宿駅を中間点とした路線がある。これに加え、指宿市内のコミュニティーバスとして、「イッシーバス」が2路線運行している。また、池田・魚見・開聞などの市内の一部の地域と市街地を繋ぐ予約型乗合タクシー「あいタク」が運行している。

海上交通では、山川港と根占港を結ぶ「フェリーなんきゅう」が運行している。この航路は薩摩半島と大隅半島を繋ぐ、海の国道（国道269号）となっている。指宿港には鹿児島と種子島・屋久島を結ぶ高速船「トッピー」と「ロケット」が、指宿港から鹿児島港、種子島、屋久島へ運航している。

道路は、国道226号、県道17号指宿鹿児島インター線、南薩東部地区広域農道などで他都市と繋がっている。国道226号は、指宿市の主要幹線道路である。令和元年（2019）の1日当たりで14,000台の通行量があり、市内で最も利用者が多い路線の一つである。国道226号は江戸時代に整備された「谷山筋」^{たにやますじ}が基になっており、幕末の天保年間に改良整備され、現在の国道とほぼ同じルートとなった。

県道17号指宿鹿児島インター線は、全線が有料道路「指宿スカイライン」である。指宿市池田を起点とし、鹿児島市田上の九州自動車道鹿児島インターチェンジを終点としている。このため、高速道路と接続する道路として観光利用に加え、第二国道的な役割を果たしている。

南薩東部地区広域農道は、鹿児島市喜入瀬々串町^{きいれ せ せくしちょう}の県道23号から指宿市開聞仙田付近の県道28号を繋いでいる。また、市域では都市計画道路が29路線あり、整備が進捗中である。

第3節 歴史的環境

1 歴史

(1) 旧石器時代

① 県本土最古級の遺跡と定住集落のさきがけ

本市の北部の大字岩本、大字小牧を中心とした台地上には、旧石器時代の遺跡が集中して発見されている。西多羅ヶ迫遺跡では、30,000年前の石器が発見されており、鹿児島県本土で最も古い時期の遺跡が本市に形成されたことがわかる。

大字西方の水迫遺跡（市指定）では、15,000年前の後期旧石器時代の石器とともに、^{たてあな}竪穴建物跡などが発見された。15,000年前の生活痕跡がこれほどまとまって見つかった例は、日本国内でも類を見ない。水迫遺跡は、「日本の集落のさきがけ」とであるとされている。



図47 西多羅ヶ迫遺跡

(2) 縄文時代

① 縄文土器と弥生土器の新旧関係がわかる

大字十二町の橋牟礼川遺跡（国指定）では、開聞岳の火山灰を挟んで、上から弥生土器、下から縄文土器が出土することが確認され、日本ではじめて縄文土器が弥生土器より古いことが証明された。



図48 橋牟礼川遺跡

② 南島文化の窓口

大字十二町の南摺ヶ浜遺跡では、トカラ列島の中之島から沖縄本島までに分布する^{うしゆくじょうそうしきどき}宇宿上層式土器が出土した。このことから、縄文時代の終わりに、海を越えた交流が行われていたことがわかる。

(3) 弥生時代

① 北部九州から運び込まれた貴重な鏡

大字西方の横瀬遺跡では、弥生時代後期の^{こがたぼうせいきょう}小型仿製鏡*が出土した。これと類似する鏡は、韓国や佐賀県の遺跡から出土している。このため、この鏡は指宿に北部九州からもたらされたものであり、弥生時代に広域の交流が行われたことがわかる。

※小型仿製鏡：弥生時代に中国鏡を模倣して北部九州で生産され、もたらされた銅鏡。直径7センチ程度と小型のことが多い。

② 県内で初めて発見された土器製作工房

弥生時代の土器製作は、集落内で^{のや}野焼き*していた。大字西方の中尾迫遺跡では、県内で初めて、弥生時代後期の土器製作工房が発見された。工房は集落と別の場所に設けられていたことから、弥生時代後期には土器製作が集落とは別の場所で行われていたことが明らかになった。

※野外で地面にくぼみを掘り、土器を並べて焼く方法。

(4) 古墳時代

① 県内最大の埋葬遺跡と本土最南端の古墳

大字山川成川の成川遺跡では、昭和32・33年（1957・1958）の発掘調査で348体の人骨が発見された。この遺跡は、弥生時代から古墳時代の鹿児島県内で最大規模の埋葬遺跡である。発見された墓は、地面に穴を掘っただけの^{どこうぼ}土壇墓のみであり、この地域の埋葬方法を示している。

一方、大字十町の^{やじがゆ}弥次ヶ湯古墳（市指定）は、本土最南端の^{えんぶん}円墳である。この古墳は直径17.5mの円墳であり、県内でも大型に属する。



図49 弥次ヶ湯古墳

このため、5世紀後半から6世紀前半に、指宿の有力者が大隅半島に勢力を伸ばしていたヤマト政権と関係を持っていた可能性が高い。

② 他地域との交流の中心であった古墳時代の拠点集落

鹿児島県内で最大規模の古墳時代の集落である橋牟礼川遺跡（国指定）は、出土遺物からヤマト政権の中心地の近畿地方や、朝鮮半島との関連が深い北部九州などの地域との交流の中心的役割を担っていたことがわかる。

(5) 古代（奈良時代・平安時代）

① 隼人前後の歴史

奈良時代には、律令制度に基づき、国家体制が整備されていった。7世紀後半から9世紀初頭に南九州の人々は、朝廷から「隼人」と呼称された。隼人は朝廷の政策に従わず、抵抗を繰り返した。このため、朝廷は養老4年(720)に兵士1万人を派兵し、これを鎮圧した。延暦19年(800)、南九州で班田制が施行され、朝廷による支配が完成した。橋牟礼川遺跡（国指定）と大字十町と大字十二町の敷領遺跡では、南九州の人々が朝廷から隼人と呼称された時期とその前後の時代の歴史を示している。

② 貞観16年の火山災害で途切れた指宿地域南部の歴史

開聞岳は、貞観16年(874)旧暦3月4日に噴火した。橋牟礼川遺跡では集落の全てが火山灰で埋もれ、敷領遺跡では火山灰を除去した復旧痕跡が発見されたが、作業は未完に終わっている。この災害は、『日本三代実録』に記録されているが、実際に遺跡で記録が裏付けられた貴重な事例である。指宿地域の南部では、開聞岳の火山災害から数百年間にわたって生活痕跡が発見されず、その間の歴史が途切れたことがわかっている。



図50 敷領遺跡埋没建物

(6) 中世（鎌倉・南北朝・室町・戦国時代）

① 指宿氏の登場とその後の指宿をめぐる攻防

鎌倉時代初めから室町時代初めに指宿を治めたのは、指宿氏である。当時の指宿の様子は、指宿氏が遺した中世の文書群指宿文書（市指定）から知ることができる。南北朝時代に6代当主指宿忠篤は、大字西方の松尾城跡（市指定）を造営したとされる。この城は、江戸時代が始まるまで、指宿郡の政治の中心となった。戦国時代には、島津氏や頼娃氏などが松尾城をめぐる攻防戦を繰り返したことがわかる。

② 薩摩国一宮に集まる富

頼娃郡に含まれていた枚聞神社は、薩摩国一宮として薩摩半島の宗教的中心であるだけでなく、大きな権力を有していた。このことは、宝物殿に、国内だけでなく海外からもたらされた、湖州鏡（12～13世紀?）、元代青磁瓶（14世紀）、常滑甕（14世紀後半）、インドネシア製鏡（14～15世紀）などが収蔵されていることから知ることができる。

③ ヨーロッパ世界に初めて知られた日本「山川」

天文15年(1546)、ポルトガル人の商人ジョルジュ・アルバレスが山川に半年ほど滞在した。アルバレスは、フランシスコ・ザビエルの依頼で、山川で見聞したことを『日本報告』にまとめた。ヨーロッパの人々に初めて紹介された戦国時代の日



図51 中世山城配置図

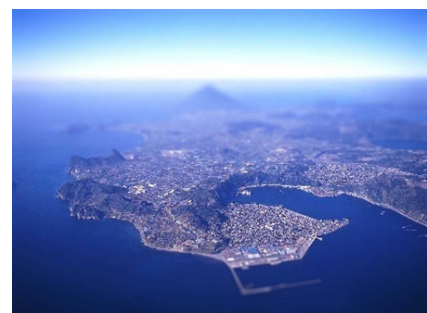


図52 山川港

本人の姿は、山川の人々の様子であった。

(7) 近世（江戸時代）

① 藩港山川港は琉球に至る唯一の門戸

山川港は、江戸時代において鹿児島藩の藩港^{はんこう}になった。また、海外へ開かれた数少ない門戸の一つ「琉球口」として琉球貿易の拠点となった。このことから、山川港は鹿児島藩に富をもたらした重要な港であったことを示している。

琉球航路の船員であった前田利右衛門^{まえだりえもん}は、宝永2年（1705）に琉球からサツマイモの種芋を持ち帰り、その栽培方法を普及したと伝わる。鹿児島藩では、サツマイモ栽培が広まっていたため、享保の大飢饉などにおいて餓死者がほとんど出なかった。このことが、後に幕府によってサツマイモ栽培が奨励されることに繋がったことがわかる。



図53 前田利右衛門紙芝居

② 鹿児島藩一門家今和泉島津家

江戸時代中期には、鹿児島藩4代藩主島津吉貴^{よしとか}が一門家の整備を行った。今和泉島津家は、延享元年（1744）に設置され、大字岩本を中心とする今和泉郷を所領とした。大字岩本には、本領本宅が置かれたが、現在も今和泉島津家に関連する歴史文化資源が多数遺っており、江戸時代の様子を知ることができる。

③ 鹿児島藩財政改革に果たした指宿の海商の役割

鹿児島藩は、江戸時代後期には財政的に困窮していた。このため、10代藩主島津斉興は、天保年間から様々な財政改革策を講じた。その中で、公共工事や南西諸島の黒糖を始めとした特産品の育成、藩内の海商の育成を行った。大字湊を拠点とする8代濱崎太平次は、黒砂糖運搬や琉球貿易に加え、幕府が許可した以上の中国製品を売買するなどの鹿児島藩が主導した密貿易に従事した。太平次をはじめとする指宿の海商の活躍は、鹿児島藩に大きな富をもたらした、財政改革の成功に導くことになったがわかる。



図54 8代濱崎太平次像

④ 幕末の外国勢力との対峙^{たいじ}

幕末の鹿児島藩には、異国船が度々接近した。天保8年（1837）に、浦賀^{うらが}で砲撃にあったアメリカ船籍のモリソン号が漂流民の返還と通商を求めて山川港に接近したが、鹿児島藩は追い払った。10代藩主島津斉興は、弘化4年（1847）に指宿神社の造り替えを行った際、「敵国降服」扁額^{てきこくこうぷく}（市指定）を奉納し、法力で異国船を退けようとした。また、山川港周辺などに多数の砲台を設置し、山川成川には黒色火薬製造所の成川銃薬方^{じゅうやくかた}を整備した。指宿は、欧米諸国からの脅威の最前線であったことを示している。

(8) 近代・現代

① 廃仏毀釈^{はいぶつきしゃく}と遺された仏像

明治元年（1868）、政府が神仏分離令を發布すると、鹿児島藩内には廃仏毀釈^{はいぶつきしゃく}の嵐が吹き荒れた。指宿でもすべての寺院が打ち壊され焼かれた。このため、市内には完全な形の仏像がほとんど遺っていない。例外的に遺ったのは、地域の人々によって守られた指宿光明禅寺の木造阿弥陀如来立像^{いぶすきこうみょうぜんじ}、久保観音堂の木造阿弥陀立像^{くぼかんのんどう}（県指定）、木造千手観音坐像^{もくぞうせんじゅかんのんざざう}（市指定）などである。このことから、廃仏毀釈の激しさを示している。

② 西南戦争と近代指宿への道

政府が行った廃藩置県断行などの急激な改革や身分秩序の再編に対する反発から、士族による反乱が西日本

各地で発生した。佐賀の乱を起こした江藤新平^{えとうしんぺい}が、山川鰻に滞在していた西郷隆盛^{さいこうたかもり}を訪ね決起を促した。

その時の出来事を記録した『樺山資紀文書』^{かばやますけのりもんじょ}とともに、西郷隆盛のシャツが鰻集落に遺っている。明治10年（1877）の西南戦争^{せいなんせんそう}には、指宿・山川・開聞から440人程が出兵した。市内各地には西南戦争招魂碑^{しょうこんひ}が建立されており、多数の戦死者を出したことを示している。一方、宮ヶ浜^{みやがはま}には明治以降指宿郡役所と村役場が置かれ、指宿の政治の中心であり続けた。さらに、商家が建ち並び、当時の経済の中心地となった。現在も当時の建物群が遺っており、往時の繁栄を示している。

(9) 戦争の時代

昭和16年（1941）に太平洋戦争が開戦した。薩摩半島最南端に位置する本市は、戦略上重要な土地であった。昭和19年（1944）に指宿海軍航空基地が整備され、昭和20年（1945）に沖縄戦に備え特攻基地となった。また、本土決戦に備えるため摺ヶ浜^{へいしやほうだい}平射砲台などが置かれた。昭和20年（1945）に、指宿海軍航空基地や山川福元が大規模な空襲を受けた。山川石の石堀には現在も空襲跡が遺っており、太平洋戦争の実態を示している。

(10) 新婚旅行ブームと鹿児島国体 観光地指宿の発展

昭和29年（1954）4月1日に指宿町と今和泉村が合併し、指宿市が誕生した。新指宿市は新市建設計画において、温泉観光都市として発展を図るという基本方針を打ち出した。

昭和30年代から50年代にかけての新婚旅行ブームに伴い、指宿への観光客が急増した。昭和31年（1956）の指宿観光ホテルの建設を皮切りに、本市の海岸部を中心として大型のホテルの建設が進み、本市の観光施設が整っていった。また、昭和47年（1972）の第27回国民体育大会「太陽国体」に伴い、鹿児島県内のインフラ整備が進んだ。指宿では、昭和44年（1969）に指宿スカイラインが開通し、後に九州自動車道と接続する観光道路となった。この結果、本市では昭和30年代前半に年間50万人に満たなかった観光客数が、昭和49年（1974）に300万人を突破し、平成4年度（1992）には350万人に達した。温泉観光都市指宿は、このように築かれたことを知ることができる。

またこの頃、橋牟礼川遺跡で、指宿駅西部土地区画整理事業に伴う発掘調査を行った。火山災害遺跡の発見が相次ぎ、平成8年（1996）の史跡指定範囲の拡大につながった。

(11) 平成と令和 合併とコロナ禍

平成11年（1999）から政府主導で市町村合併が進められた。平成18年（2006）1月1日に、指宿市、山川町、開聞町が合併し、現在の指宿市が発足した。

本市は、平成27年度（2015）から平成30年度（2018）に県内の鹿児島藩大名墓所の確認調査に伴い、今和泉島津家墓所の確認調査を実施した。この結果、今和泉島津家墓所は、令和2年（2020）3月10日に国史跡に指定された。

一方、令和元年（2019）12月に中国武漢市で確認された新型コロナウイルス感染症は、令和2年（2020）1月に国内で初めて確認された。4月16日には全都道府県に緊急事態宣言が発出されたが、令和5年（2023）5月8日に、この感染症は5類感染症に移行した。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の流行は、地域コ



図55 西郷隆盛のシャツ



図56 指宿海軍航空基地慰霊碑



図57 新婚旅行客で賑わう指宿駅

コミュニティの運営に大きな影響を及ぼした。歴史文化資源の保存と活用については、地域コミュニティがその基盤となっていることから、今後に大きな課題を残したのである。

2 伝統行事と郷土芸能の歴史

(1) 祭などの伝統行事

季節ごとの行事や祭りなどの伝統行事は、近世には成立していたものが多いが、近年の地域における人間関係の希薄化による地域コミュニティの変質によって、廃れた地域が多い。現在も遺されている伝統行事としては、以下のようなものがある。

① 正月行事

大字西方の尾掛集落で行われるイシナトは、1月7日までの適当な日に子どもが竹の弓矢でダイダイの実を射る行事である。大字浜児ヶ水のサンコンメ（市指定）は、1月7日に行われる。数え年15歳の男子が、長さ2mほどある太い孟宗竹を担いでぐるぐる回り、竹を地面に放り投げる。これを繰り返すと、竹が割れて中に入った小銭が飛び散る。見物人はこの小銭を拾い1年の幸運を祈る行事である。江戸時代の漁師町の行事が遺ったものとされる。大字利永のメンドンは、1月の第3日曜日に面を被ったメンドンが集落を練り歩き、見物人の顔にススを塗りつけ、一年間無病息災をもたらす行事である。利永のダセチッは、子どもが棒で地面をつき新婚家庭の子宝を願う行事である。市内各地域で行われる鬼火焚きは、子どもが正月飾りなどを青竹や割り木とともに積み上げ燃やし、無病息災を祈る行事である。鰻のウナツメイは、地獄の釜の蓋が開く1月16日に、地藏堂で先祖参りの祭りをを行う行事である。伊勢講・観音講は西指宿中学校区・山川中学校区・開聞中学校区に広く分布する。集落で人々が伊勢神や観音にお参りをし、ごちそうを食べる寄り合い行事である。



図58 イシナト



図59 サンコンメ

② 春の行事

揖宿神社の浜下りは、旧暦3月20日に揖宿神社で祭典を行った後に、神馬を先頭に羽織・袴の青年が神輿を担ぎ、稚児や巫女が行列し、宮ヶ浜に巡幸する行事である。

③ 夏の行事

鰻集落のツッノモツイは、集落境に餅や団子等を吊り下げた綱を張り、集落の外に向けて小石を投げる行事である。

六月灯は、江戸時代から続く集落行事で、旧暦の6月を中心にそれぞれの集落で日程を決め、神社や集落公民館等で灯籠を飾る行事である。



図60 揖宿神社の浜下り

④ 秋の行事

枚聞神社ほぜ祭りは、10月14日・15日・16日に、枚聞神社で前夜祭、例大祭、御神幸祭・稚児行列が行われる祭りである。大山の十五夜綱引きは、旧暦の8月15日に子どもが綱引きをする行事である。仙田のオットイは、中秋の名月の夜に、子どもが十五夜の供物を盗むことが許される行事である。

⑤ 冬の行事

亥の日の石突きは十二町の片野田集落と大字福元で行われており、子どもが神の使いとして豊作に感謝するため石突きをする行事である。内神祭やウッガンコは大字西方の道下東集落・垂門集落・細田西集落、大字池田の仮屋集落、大字福元、大字仙田に遺る、赤飯を炊き神に供える行事である。

(2) 郷土芸能（民俗芸能）

本市では、下記のように35団体によって郷土芸能が継承されている（資料編参照）。本市の郷土芸能の特徴は、種類が多いこと、服装や振りが派手であること、薩摩半島北部や大隅半島に多く見られる太鼓踊りや田遊・狂言が少ないこと、近世前期以前に成立した古い形の芸能と推定できるものがあること、琉球系芸能があることである。また、近代以降に流入した芸能もある。

田楽系統の棒踊りは11団体（井手方棒踊り・下仙田棒踊り・岩本棒踊り・小川区棒踊り・上野棒踊り・新西方棒踊り・川尻棒踊り・大山棒踊り・田之畑棒踊り・浜児ヶ水棒踊り・福元棒踊り）あり、成川そば切り踊りもこの系統とみられる。風流系統では中川ごちよう踊りがあり、漁労関係の芸能として山川漁り節がある。神楽の系統では、成川南方神社神舞（市指定）、枚間神社神舞がある。疱瘡踊りの系統では脇浦古琴節がある。

近世前期以前とみられる古い形のものでは、開聞しだら節、玉利奴踊り、庄五郎踊りがある。開聞しだら節は文化9年（1812）の記録があり、『歌場拍子』の風情があり、古い芸能ではないかとされている。玉利奴踊りは、天明8年（1788）製作の鉦を現在でも使用しており、戦国時代に成立したと伝わっている。庄五郎踊りは、応永27年（1420）に踊り始めたと伝わっている。

江戸時代中期に流行した小唄基調の芸能は、宮坂田踊り、小牧四つ竹がある。また、江戸時代に山川港に到着した琉球使節団は枚間神社へ参拝し、芸能を奉納した。この芸能が基になった琉球系芸能は、利永琉球傘踊り（市指定）、大山琉球人踊り、入野物袋琉球人踊り、中小路唐人踊り、宮之前唐人踊りがある。

琉球以外の地域から伝来した芸能では、江戸時代に今和泉島津家当主が日向から導入したと伝わる下門猿の子踊り（市指定）と上野猿の子踊り（市指定）、明治時代に宮崎県方面から伝来したと伝わる田中手拍子踊り、日清・日露戦争の時期に兵士の運を祈る芸能が集落に伝わった士官節、大正時代末期に伝わった川尻剣舞、昭和初期に県内で流行した相撲甚句、同時期に北薩から伝わったチョイノチョイ、昭和後半に町おこしの一環で始まった開聞竜宮太鼓がある。



図61 指宿市の郷土芸能

3 産業史

(1) 江戸時代の産業

① 農林業

i 菜種・燭栽培

鹿児島藩は、天保改革の一環として特産品振興を進め、各地で菜種・燭の栽培に積極的に取り組んだ。指宿では菜種油の生産のために、山川成川で水車による菜種油圧搾が行われた。これは、天保7年（1836）6月に山川を訪問した伊東凌舎が著書『鹿児島ぶり』に記録している。

燭は、蠟燭の原料をとるために栽培された。指宿市考古博物館時遊館COCCOはしむれが所蔵する『前田勘助日記』には、指宿郷地頭仮屋の役人が、燭木の生育状態を確認し、生育不良があると罰したという記録がある。つまり、燭栽培は藩を挙げた事業であったことがわかる。

また、幕末の天保年間に困窮を極めていた今和泉島津家は、10代藩主島津斉興から改革資金2千両を与えられ、領内で菜種と燭の栽培に努め、財政立て直しに成功した。

ii 葉たばこ栽培

『薩隅煙草録』には「慶長の初年その種子を入手して、薩摩国揖宿郡指宿の里に植えたものは、日本の煙草栽培の始まり」と伝え、指宿は日本のたばこ発祥の地とされている。かつて指宿産のたばこは「指宿葉」と呼ばれていた。大正4年（1915）から終戦まで皇室の御料用に指定されていたほどの良品であった。

現在でも、指宿では葉たばこ栽培が盛んに行われており、令和4年度（2022）の作付面積は19.5ヘクタールである。

iii スイカ栽培

『三国名勝図会』には、「西瓜 當村に出る者皮薄くして、味甘美なり、藩人山川西瓜と称じ、賞味す、藩内山川國分を以て最上とす」とあり、江戸時代には山川のスイカは評判だったことがわかる。現在も「徳光スイカ」のブランド名で人気がある。開聞岳の裾野にあたる徳光地区一帯には、火山噴出物が厚く堆積している。これらを含む土壌は、礫質土壌で、通気性、透水性に優れ、施肥量のコントロールが比較的容易で、かつ、保温効果が大いという特性がある。これがスイカの生育には最適である。



図62 徳光スイカの収穫

② 製造業

i 白土生産

安土・桃山時代の武将である島津義弘は、文禄・慶長の役において朝鮮の文化や産業技術の導入を図るため、陶工などを連れ帰った。当初は、朝鮮の白陶土を使った「火計手」茶碗が生産され、「白薩摩」の手本となった。この後、鹿児島藩領内で白土の探索が行われ、寛政年間の初めに、山川成川村で白土が発見された。白土は白薩摩の貴重な原材料であった。

幕末に刊行された『三国名勝図会』には、揖宿郡指宿郷は、白土が山や溪谷の所々に産し、陶器の生産に適しているという記載や、鹿児島島の堅野や伊集院の苗代川の陶器の土は指宿郷産を多く用いているという記載がある。ただ、指宿白土はミョウバン石を含み、焼成時に器の亀裂や汚損の原因となった。このため、次第に外来産の白土などに置き換わっていった。

昭和25年（1950）に民間会社が産業用として白土採鉱を始めた。旧指宿町は、昭和27年（1952）に指宿陶磁器研究所を設置し、長太郎焼の有山長太郎正夫を招へいして、「指宿焼」の生産を始めた。近年では、指宿の特産品として好評を博している。

白土は、昭和30年代ごろまで紙、ゴム、薬品、化粧品、髪洗い粉などの材料として生産され、昭和32年（1957）

には年間3,000 t の生産があったが、現在稼働している採掘場はない。

ii 硝石製造

硝石は黒色火薬の主原料である。日本では、硝石は天然には産しないため、戦国時代以来生産されてきた。

11代藩主島津斉彬^{なりあきら あんせい}は、安政5年(1858)に西洋式生産技術の「硝石丘法」^{しょうせききゅうほう}を導入した。元治元年(1864)、12代藩主島津忠義^{ただよし}は鹿児島市谷山に大規模施設を設置し、硝石生産を行った。

文久3年(1863)には、欧米勢力に対応するために、藩は施設拡充を進め、山川成川に「成川銃薬方」を設置した。これに対応するように、元治2年(1865)に大字湊で「硝石丘小屋」^{しょうせききゅうこや}が稼働していた。このことは『前田勘助日記』の記事から知ることができる。

しかし、日本の開国に伴って、指宿の砲台が閉鎖され、硝石生産も終了した。

③ 温泉業

本市は、第二次指宿市総合振興計画の将来都市像の一つに「温泉等の多彩な地域資源を活用する世界に誇れる『保養観光都市』」を掲げている。本市の温泉地としての発展は、近世にその起源を求めることができる。砂むし温泉^{すりがはま}が有名な摺ヶ浜^{すりがはま}には、江戸初期に鹿児島藩2代藩主島津光久^{みつひさ}が温泉別荘である「行館」^{ぎょうかん}を置いた。『三国名勝図会』によると、「砂蒸は諸病を治し、筋骨の痛みに効果がある」とされ、光久は「神井」^{しんせい}と名付けたとされている。こうして、摺ヶ浜温泉は鹿児島藩の代表的温泉となり、文化7年(1810)に八隅蘆庵^{やすみろあん}が著した『旅行用心集』の中で、九州の36か所の温泉の1つとして紹介されている。



図63 天然砂むし温泉

(2) 近現代の産業

① 農林業

i 温泉利用農業

大正7年(1918)、鹿児島高等農林学校(現鹿児島大学農学部)は、指宿農業試験場を設立し、ナスの温泉熱利用の栽培試験を行った。

民間では、大正11年(1922)に指宿温泉熱利用副業組合が組織され、ナスやスイカを栽培した。第二次大戦後は、小ナスの温泉利用栽培を再開し、昭和30年(1955)には、スイカ・きゅうり・トマト・ネットメロン・ピーマンなどの生産を盛んに行った。

昭和26年(1951)以降、ビニルフィルムが普及したことで、温泉熱を利用した観葉植物の栽培農家が増加した。昭和38年(1963)には、指宿観葉植物組合が組織され、1970年代には生産規模が拡大し、全国に販路を広げていった。

昭和53年(1978)には、農業生産組合法人グリーンファーム指宿生産組合が観葉植物団地を建設し、当時、東洋一の生産地と呼ばれた。現在でも、本市は全国屈指の観葉植物生産地となっている。

② 製造業

i 製塩業

本市では、江戸時代には入浜式製塩を行っていたと考えられ、開聞川尻や脇浦では明治中期まで製塩を行っていた。

近現代における本格的な製塩業の開始は、大正11年(1922)である。水分を蒸発させるために温泉熱を利用した温泉熱利用製塩である。昭和19年(1944)には、鹿児島科学工業(現サンケイ化学)が山川伏目で泉源を掘削し、製塩工場を設置した。昭和20年(1945)には、自給製塩組合を組織し、昭和29年(1954)には年間3,500 t の塩を生産した。指宿塩業組合は、昭和34年(1959)に山川成川に真空式製塩工場を建設し、濃縮塩水をパ

イブラインで送水するまでになった。ところが、全国的な塩の生産過剰が発生したことで、昭和34年（1959）に塩業整備臨時措置法が施行され、塩田が廃止された。そして、指宿塩業組合が昭和39年（1964）に解散し、指宿での製塩業は終了した。

ii 鰹節製造

明治40年代、山川港は鰹漁場の中継地であり、水揚げ場となっていた。明治42年（1909）に、鰹節製造が開始された。大正から昭和初期には、山川の漁師が鰹節製造へと転換した。昭和40年代後半に本格的な冷凍庫が登場し、冷凍鰹の水揚げが可能となり、鰹節工場は通年操業になった。昭和50年代には山川港東側の埋め立て地に水産加工団地を造成し、大型まき網船の入港が可能となった。このことで鰹の水揚げ量はさらに増大し、鰹節産業がさらに拡大した。現在、全国の鰹節の21%が指宿産であり、全国シェア3位を誇る。



図64 山川本枯れ節製造風景

③ 鉱業（金鉱業）

池田周辺は、^{おにかどびら}鬼門平を中心に金鉱山が分布しており、明治30年前後に多くの金鉱山が開発された。最大規模の^{おおたにこうざん}大谷鉱山は、^{こうか}弘化元年（1844）に鹿児島藩が発見した金鉱山である。明治27年（1894）に本格的な採鉱が行われた。最盛期には1,000人近い労働者が採掘作業に従事したという。昭和18年（1943）の金鉱山整備令により、池田周辺の金鉱山は休山、または閉山し、“池田ゴールドラッシュ”は終わりを迎えた。

④ 観光業

指宿が、全国屈指の温泉地になったのは、現代になってからである。昭和30年代から50年代にかけての新婚旅行ブームによって、多くの観光客が指宿を訪れた。これに先がけ、^{いわきよはちろう}岩崎興八郎（名誉市民）が昭和28年（1953）に指宿観光株式会社を設立したことで、指宿市街の海岸線に面してホテル建設が促進された。

また、魚見岳と海岸線の風景がハワイのダイヤモンドヘッドに似ているとして、^{しもたけはらひろし}下竹原弘志（名誉市民）らが「東洋のハワイ」のイメージづくりを進めた。併せて、公務員などの夏の制服はアロハシャツに統一された。同じころ、鹿児島大学農学部指宿試験場では、熱帯植物の栽培振興を行い、市街地の街路樹やホテル街にヤシの木が林立し、東洋のハワイのムードを盛り上げた。

開聞地域においては、昭和41年（1966）に^{いのうえひろのり}井上廣則（名誉市民）らが、^{とうせんきょう}唐船峡の観光開発のために町営そうめん流し施設事業を発足した。昭和42年（1967）には回転式そうめん流し器を開発し、「唐船峡公園」となり、利用者が年間20万人を突破した。

昭和56年（1981）には、いぶすき菜の花マラソンの第1回大会（当時の名称は「指宿温泉マラソン」）を開催した。年々大会規模が拡大し、第11回大会には参加者が1万人を突破し、第29回大会では2万人を超えた。

こうして、「観光地指宿」のイメージが向上し、本市は全国屈指の温泉地として多くの観光客を集めている。



図65 アロハ宣言



図66 唐船峡そうめん流し



図67 指宿なのはなマラソン

4 災害史

(1) 火山災害

開聞岳の誕生は、4,000年前の縄文時代後期であり、以来、12回の大規模な噴火が起きている。指宿地域においては、考古学的調査によって開聞岳噴火に伴う火山災害についての資料が蓄積^{ちくせき}してきており、7世紀後半に発生した10回目の噴火、貞観16年（874）に発生した11回目の噴火による災害状況を把握しつつある。ここでは、11回目の噴火に伴う平安時代の火山災害に関して触れる。

① 平安時代の火山災害

開聞岳の11回目の噴火は、『日本三代実録』^{にほんさんだいじつろく}に記録されており、貞観16年(874) 3月4日（グレゴリオ暦3月25日）夜に発生した。

噴火は、爆発音や地震とともに始まり、翌5日も一日中火山灰が降り注ぎ、昼も夜のように暗い状態だった。夕方近くに降雨が始まり、作物がことごとく焦枯^{しょうこ}した。さらに土石流^{どせきりゅう}が発生し、魚類や亀類が無数に死んだ。また、死魚を食べた者は死んだり、病になったと記述されている。

この時の噴火で火山灰に埋没した建物は、橋牟礼川遺跡と敷領遺跡で複数確認されている。橋牟礼川遺跡の建物は、屋根に堆積した火山灰が降雨で重くなり、倒壊した。その後、土石流で建物内部が完全に埋没した。

開聞岳噴火に伴う火山災害の特徴は、堆積した火山灰が固結して、復旧を阻んだことである。敷領遺跡^{おおあぜ}においては、復旧を試みた痕跡が見つかっている。火山灰に埋もれた水田大畔の一部を掘り起こした痕跡と、建物の周辺の火山灰層を掘り起こそうとした痕跡が確認された。ただ、噴火活動の再活発化により、復旧作業は未完に終わっていた。

貞観16年（874）時点の行政の中心は、敷領遺跡一帯であった可能性が指摘されているが、火山災害の影響で、平安時代末以降、指宿の政治的中心地は指宿市西方方面に移ったと考えられる。

(2) 風水害・土砂災害

① ルース台風

昭和26年（1951）10月14日に、ルース台風が鹿児島本土に上陸した。県下の気象状況からみる勢力は、時間最大雨量70.9 mm^{あくねし}（阿久根市）、日最大雨量137.5 mm（阿久根市）、瞬間最大風速46.5m/s（鹿児島市）、最大風速42.5m/s^{まくらざし}（枕崎市）である。指宿市では大きな被害が発生した。建物被害は、全半壊が985棟、流失が14棟、浸水が458棟となっている。

② セタ災害（土石流）

平成5年（1993）7月6日～7日に、時間最大雨量54.0 mm、日最大雨量304.0 mmの豪雨に伴い、鰻集落において土石流が発生した。建物被害は全半壊が5棟、浸水が14棟で、死者2名、負傷者3名であった。

③ 火災

ここでは、現代の火災のうち、焼失家屋が100棟を超える事例を記載する。

- ・東方大火 昭和13年（1938）2月24日に田之畑集落で発生、焼失家屋358棟。
- ・尾掛^{おかけ}火災 昭和14年（1939）3月20日に尾掛集落で発生。焼失家屋261棟。
昭和33年（1958）11月19日に尾掛集落で発生。焼失家屋178棟。
- ・上野集落火災 昭和40年（1965）5月18日に大字開聞上野で発生。焼失家屋102棟。